

early-childhood education のいとなみ

—— 人格形成期の教育 ——

高橋 さやか

いまでも、またしても、と言われそうな気がしますが。書く方もそう思わないでもありません。けれども、今日、できるだけ素朴にできるだけ根柢からたしかに、できるだけ単純にできるだけ確実に充実した保育を、とどうしてもそう考えてしまいます。

早い時期の子どもの教育は、おとなの合目的主義ではいとなみになり得ないのです。いとなみになり立たないのに、目的達成はあり得るはずがありません。教育課程、保育内容、領域・ねらい・

内容、とくりかえし熱心に論じられる中で、教育対象が「子ども」「発育期の人間」に外ならないこと、生まれ、生きはじめた以上、一人ひとり「生活者」であること、人間の規格規準としての「人格」はその形成の因子は遺伝子にすでにくみ込まれたものであるとはいえ、受精卵から出発して胎児期を経、そして誕生してからの「生活において」形成しつづけられるものであること、早い時期の子どもの教育は、とりもなおさず生活教育であり人格形成の（その意味での発達課題達成

の)教育である、それ以外のものではないと考えるのです。であれば、保育・幼児教育のいとなみは、生活学習(習慣形成)、遊び・しごと活動——生活体験・経験のすべて、にかかり、いつでもどこで・だれ(とだれ——グループ)が、何を(何で・如何に)為したか、一人ひとりの子どもそして彼の(属する)保育集団自身の生活活動そのものに外ならない——従って、保育内容の領域は、すべて、生活活動の、その(領域名の)側面をいうことになるはずで。

新教育要領の領域を、生活学習(習慣形成)の、健康にかかわる・人間関係にかかわる・環境にかかわる・言葉にかかわる・表現にかかわる側面、遊び・しごと活動の、健康・人間関係・環境・言葉・表現それぞれにかかわる側面、として考えるなら、(筆者にとっては少々無理するところなしとは言い兼ねるが)まあそれなりに何とか納

まらなくはないでしょう。

結局私たちは、子どもが、生活者として、彼自身にとって順当な発育を遂げ、おとなとして一人前の生活者になるように——、人格をトータルなものとして見守る態度をもって「発育する人間」にかかわり「人間の発育」に与^{あずか}らなければならぬのです。

発育する人間とその発育に与る人間との生活が、常なる現在、生活過程の一こま——こまが、共有され共同活動によって充足されるものであること。……のために、……になるように、とあまりに限定的に合目的になることから、何とか脱却して、時間と空間と、その中で生きて育つこと、を大切にしたいと痛切に思います。

(西南女学院)